

付録 参考資料

1. 天文学研究連絡委員会推進書

我国の光学・赤外線天文学の推進について

昭和60年3月28日

日本学術会議天文学研究連絡委員会

日本学術会議天文学研究連絡委員会は、我国の天文学研究の推進のため、全国共同利用の大型施設として、米国ハワイ島マウナケア山頂に、光学・赤外線域の天文観測に用いられる口径7.5m級の大型望遠鏡を設置する計画を進めることが必要かつ時宜を得たものであると考える。

天文学における最近の進歩は著しく、宇宙と、その中の銀河、星、惑星系などの誕生やそれらの進化の過程の解明などが急速に進展しつつある。この進展には、我国を含む各国の電波からX線に至る広い波長域における観測が寄与して来たが、その中でも可視光による観測は常に重要な役割を果たして来た。世界各国でも大型光学望遠鏡が競って建設されて来たのはこのためである。さらにここ数年、赤外線域の研究もその検出装置の発展により大きく進み始め、最近の観測の結果は赤外線域の研究の重要性が極めて大きい事を示している。

光学望遠鏡に関しては1960年に建設された東京天文台岡山天体物理観測所の188cm反射望遠鏡が我国では最大のものであるが、これはその集光能力においてその後に建設された世界の大望遠鏡に大きく引きはなされるに至っている。一方、この二十年の間に我国の光学天文学研究は著しく前進し、188cm反射望遠鏡及びその後に建設された木曾観測所の105cmシュミット望遠鏡をその限界まで稼働させているばかりでなく、外国の大望遠鏡の観測プログラムにそのテーマを採用されて来た研究者も多い。このような状況で全国の関連研究者は、赤外線観測機能をも併せもつ世界第一級の大型望遠鏡（“大型光学赤外線望遠鏡”）を計画立案し、その実現を強く希望している。我国の工業技術もこれを可能とするものとなっており、国際的に見てもこのプロジェクト実現の意義は極めて大きい。

日本学術会議天文学研究連絡委員会は、この様な状況のもとに、全国の関連研究者の要望する上記の大型光学・赤外線望遠鏡計画を推進することは日本の天文学研究の発展のために極めて重要であると判断し、この計画の推進に関して関係諸方面の御理解が得られる事を切望するものである。